

生涯学習情報誌

Life Learning

7 2019
Jul.
NO.347



生涯学習開発財団

みなさん、学び続けてください!!

生涯学習開発財団理事長・松田妙子「お別れの会」

令和元年（2019年）5月27日（月） 於 ホテルオークラ東京 別館



鬼の学び

⑥

定年博士

作家／出版プロデューサー／劇団主宰

鬼塚忠のアンテナエッセイ

生涯学習開発財団は、50歳以上の博士号取得支援をされていますが、故・松田妙子理事長の71歳での博士号取得を手本として制度化したそうです。私からもぜひ紹介したい、博士号取得者がいらっしやいます。吉岡憲章氏。70歳になって学びたい気持ちを抑えられず、大学院に入学し、77歳で博士号（経営情報学マヨロ）を取得。そして、その知見を今なお現場で生かしているとか。

鬼塚 この度は博士号の取得おめでとうございます。まずは先生の今までの経緯を簡単にお話いただけますか？
吉岡 今日はお招きありがとうございます。私は、この世に生を受けてから長いですからね（笑）、かいつまんでお話ししましょう。

私は1941年、太平洋戦争開戦となる真珠湾攻撃の2か月前に中国上海で生まれ、終戦の翌年の1946年に日本に引き揚げてきました。

1963年に早稲田大学の理工学部を卒業し、日本ビクターに入社しました。技術者でしたが経営に関心があがり、企画課長など事業経営に携わる仕事に従事しました。経営トップが松下幸之助翁でしたので、感化され、松下イズムを世の中に広めたいと思うようになりました。そこで入社11年後の1974年にビクターを卒業して、中小企業を対象にした経営コンサルティングの会社を創業しました。しかし、当時は中小企業の経営コンサルタ

ントという概念がなかったため、学ばべき先人もいません。参考にする書籍もありません。それならば、と自分自身が起業して、経営とは何か、中小企業の社長は何を悩むのかなど現場で実体験しながら、経営コンサルタント業を続けました。

まず初めに町工場を創業し、下請けの屈辱や資金繰りの厳しさなどを味わいました。その後、自ら商品を開発し、メーカーへと脱皮しました。さらには居酒屋など13もの会社を創業し、各業種の経営を体験していきまし。その結果、「常識破りの再建請負人」と言われるに至り、2002年に「潰れない会社にするための12講座」（中公クラクレ）を上梓し、鬼塚さんのご支援で、その後7冊の出版に至りました。

鬼塚 すごくご経験ですね。それがなぜ大学院を目指すことになったのですか？

吉岡 はい。私のモチベーションは、困っている中小企業の経営者を助けたい、という思いです。その思いを糧にがむしゃらに働き、50代60代で行った中小企業の再建は成功した例が多く、金融機関などからそれなりの評価を得たのです。しかし、それは私の経験から導かれた勘所に頼るところが大きく、コンサルタントとしてもう一

段高みを目指すために、今まで実践したものを論理的なものにし、社会に貢献したい。学問としての企業再建論にしたいと考えはじめました。それは60歳を過ぎた頃でした。10年間その思いがもやもやし、満を持して、70歳で多摩大学院に入学したのです。そして2019年に研究論文をご評価いただき、経営学博士号を賜ることになったのです。

鬼塚 おめでとうございます。人生に対する意欲がすごいです。普通、70歳というのは現役から退く年齢ですよ。それが70から大学院に入って、なお学びたいとか、まだ社会に還元したいとかというその意欲は脱帽です。とはいえ、70歳です。博士号取得を目指すなかで、諦めずに続けられるだろうか……、健康、お金、それぞれ不安もあったのではないのでしょうか。よければそのときどきで抱いた不安を聞かせてください。

吉岡 やはり健康が不安でした。まず、大学院の修士課程に入ろうと思った矢先に前立腺癌を宣告されました。その時には、もし私が生還できなかった時のことまで考えて遺言状まで書きました。幸いにも、いまは快復し、この通り元気になりました。（笑）

また、経営コンサルティング会社の経営を続けながらの論文研究です。時間をどのように捻出するかが大きな課題でした。研究を優先し、博士号取得まではすべての時間を宛てました。その上で、土日はフルタイム、平日でも業務の準備を終わらせてから毎日夜中の2時、3時まで論文研究にのめりこみました。

鬼塚 途中でくじけそうになったこともあるかと思えます。そのときはどのようにして乗り切ったのですか？

吉岡 社員と妻に助けられました。論文執筆には膨大な時間が割かれるので、社員の理解も必要です。博士号を取得すると宣言し、かかる負担を了承してもらいました。深く感謝しています。妻にも感謝しています。この博士



吉岡憲章
未来事業株式会社 代表取締役
経営プロデューサー
博士（経営情報学）、MBA

論文への挑戦だけではなく、独立するときも、関連した上場企業が破綻して、自分の財産を投げうったときも、いつも嫌な顔ひとつせずに認めてくれました。これが、私がここまで来られた要因です。だから、今回の博士号は社員や、妻など皆で得たものと思っています。

論文指導教授のアドバイスもよかった。私が混乱していると夜中でもヒントとなるメールを送ってくれました。いい論文が書けると激励をしてくれたりもしました。だから、途中であきらめるわけにはいかない、絶対投げ出すわけにはいかないという思いになりました

鬼塚 いろんな方に支えられての博士号ですね。もうひとつ聞きたいのは、若い人と比べて記憶力や理解力は落ちると思います。そのハンディはどうカバーしましたか？ 70歳なり勉強の仕方など教えてください。

吉岡 まさに、ついさつき何を言ったかさえ忘れてしまふことが度重なるような年齢です。(笑)

論文研究にあたっては、資料とデータのファイリングを意識し、効率的な情報整理を心がけました。また、幸いと言いますか、研究のテーマが私の事業に関係する内容ですので、仕事Ⅱ研究と言っても過言でないほどでした。仕事をしながらそれがそのまま復習になったり実験になったりの繰り返しができたのです。

鬼塚 机上の学問に終わらせないということですね。70

●著者プロフィール

鬼塚忠(おにつか ただし) 1965年鹿児島市生まれ。鹿児島大学卒業。大学卒業後、2年間かけて、アジア・オセアニア、中近東、アフリカ、ヨーロッパなど世界40か国を放浪。ヨーロッパでお金が底をつき、シベリア鉄道で帰国。帰国時、所持金は1万円を切っていた。1997年より2001年6月まで海外書籍の版權エージェン会社「イングリッシュ・エージェンシー」に勤務。映画の原作、ビジネス書、スポーツ関連書籍など年間60点ほどの翻訳書籍を手掛ける。次に海外の作家ではなく、日本人作家のエージェントをしたいと思い、2001年10月にアップルシード・エージェンシーを設立。現在では作家のエージェント会社の経営者であるとともに、作家、脚本家、劇団もしも主宰でもある。

著書:『風の色』(講談社)2018年映画化。『花戦さ』(角川書店)2017年映画化。日本アカデミー賞優秀作品賞受賞。『Little DJ』(ポプラ社)2007年映画化。『カルテット!』(河出書房新社)2012年映画化。『海峡を渡るパイオリン』(河出書房新社)2004年フジテレビ45周年記念ドラマ化。文化庁芸術祭優秀賞受賞。『恋文讃歌』(河出書房新社)、『僕たちのプレイボール』(幻冬舎)2012年映画化など多数。



鬼塚忠が吉岡憲章さんにインタビュー。

ともなれば年金暮らしという楽な生活もあるはず。ここまで吉岡さんの気持ちを動かしたのでしょいか。

吉岡 全国の経営者のためです。国税庁の発表では、中小企業では赤字決算の企業が68・5%に及んでいます。つまり3分の2以上が赤字経営ということなんです。ここが、景気の良いと言われていた大企業と違うところなんです。このように収益が悪く、経営再生専門家が「もう破綻するしかない」と診断した窮境状態にある企業を、私のこの博士論文のテーマである再生手法を活用することによって、80%もの中小企業を生き返らせることができる、この博士論文でも証明できました。

その結果、眠れないほど追い詰められた社長が笑顔を見せてくれます。これが私の生きがいです。

鬼塚 このインタビューを読んでいる方々も、吉岡さんのように博士号の取得を考え始めている方もかもしれません。可能ならば、大学を選ぶ際に参考になること、どのくらいお金がかかるかなどを教えてくださいただければ嬉しいのですがいかがでしょう？

吉岡 自分のこれまでやってきた仕事に関係した分野を追求できる大学院を選ぶと良いでしょう。趣味レベルでは歯が立たないです。(笑)。

また、お金に関してですが、大学院によって異なると思いますが、私の場合は修士と博士課程を修了するための入学金・授業料が700万円。他に学会に入りますので学会費や研究用書籍などを含めると、1千万円くらいだと思います。

鬼塚 かなり高額ですね。

吉岡 一見そう思われるかもしれませんが、それだけのものを学べます。

鬼塚 さすがです。最後に、『生涯学習情報誌』の読者に一言お願いします。

吉岡 これまでは、定年までが一世一代の仕事で、そのあとは余生くらいに考えるのが普通でした。しかし、今は人生100年時代です。社会に出てから定年までの40年と同じくらいの人生が定年後にあるのです。定年後こそが、これまでの経験の上に立ってさらに飛躍できる人生で、私は、盛年期、だと思っています。そう考えると、勉強で知見を拡げ、さらに働いていかなければならないと思います。それは皆様方のためにも日本のためにもそうだと思います。

そして、鬼塚さん、私が博士号取得で投資した1千万円、死ぬまでに回収してみせますよ。(笑)。もちろん税金もいっぱい払いながら。決して税金を食いつぶそうなんて思っていない。そう思うと今からの人生も楽しいものです。

鬼塚 すばらしい人生観です。老人は山を下りるのだ、そういうことばかりが昨今言われています。私も将来、吉岡さんのような考え方を持たたいと思います。本日はありがとうございます。

吉岡 ありがとうございます。

祝

2018年9月 愛知教育大学・静岡大学 博士号(教育学)取得

山田哲也さん(取得時56歳)

【論文テーマ】紙製受動歩行模型教材を使用した小学校設計学習に関する研究

子どもたちが楽しみながら設計を理解し、創造する力を育む

■思わず目がキラキラとなる授業

2016年3月、生涯学習開発財団の博士号取得支援事業に合格し、財団を訪れた山田哲也さん。その席で動画を見せられた本誌記者、財団職員らが、一様に声を上げて驚いた。博士号の論文テーマにもなった「紙製受動歩行模型教材」である。動力を持たないシンプルな紙製の模型が、2足歩行、4足歩行で動くのだ。これを使い、子どもたちが、仕組みを理解しながら作る体験型授業を、各地の小中学校や科学館などで行っているという。

不思議な玩具だが、日本古来の玩具にも似たようなものがある。伝統玩具は理論を伴わない経験的な玩具だが、山田さんはこれに理論付け、理論値と実測値を確認し、教育に利用することを発案した。

授業の中で子どもたちは紙を切り、折って、基本の形をつくる。模型はそれぞれ歩き方が速かったり遅かったりする。子どもたちは何故速いか、遅いかを知ろうとし、やがて理解し、もっと速いもの、遅いものなど、目的に向かって計画的なもののづくりを始めるのだ。動力がなくても歩行する模型にわくわくし、自分にもつくれることに喜び、創意工夫によって改良されることで達成感を享受する。子どもたちはみな、目をキラキラと輝かせている。多くの子どもが、家に帰って家族に「こんな楽しい授業は初めて」と話しているそうだ。

■教育現場を経て「教育学」の研究者へ

大学の工学部を卒業し教諭として高校に勤めていた頃から、教育学、特に小学校初等教育への関心が

強かったという山田さん。40歳を目前に大学院に入學し教育学を専攻(修士・前期博士課程終了)、県の教育委員会で学校教育の指導にあたったのち、高校・大学で教鞭を執りつづ、2013年に愛知教育大学・静岡大学共同の後期博士課程に進んだ。

山田さんの専門のひとつは「教育環境学」。聞き慣れない学問だが、教科内容などとして構成されたものを実践する教育環境を考える、新しい研究領域だ。人間は身体の成長とともに脳も段階的に発達し、小学校の中学年程度で論理的な思考が可能になるとされている。教育環境学でも、論理的思考の発達を促し、支援するためにはどんな教育の環境が必要かを、様々な分野からのアプローチによって研究している。山田さんは、10年以上前から工学的アプローチのものづくりを通して、創造・工夫する力、設計



現在複数の大学で、教育方法学、統計学、ものづくりとメディア教育など多岐にわたる研究と指導を行っている。

する力を養成する方法を研究し、実施の成果も報告されている。

■ものづくりと論理的思考

技術立国でありながら日本の小学校には「技術」科目がない。明治時代に必修科目だった「手工科」は、戦後、美術(図画工作)に取って代わられた。現在の教育課程で手工につながる科目があるのは、昭和30年代に設置された中学校の技術・家庭科のみ。中学校の3年間という年数は、小学校から高校まで「Technology(技術)」「Design(設計)」を必修科目などに行っている諸外国に比べると圧倒的に短い。

物理、数学に優れ、大学の工学部に進学した学生が、突然、創造性を求められ困惑することもあるそう。技術立国を維持するには、ものづくりの本質を学ぶ必要があるのではないかと、山田さんの所属する日本産業技術教育学会では、小学校・高校における技術科目の研究を行っている。

一方で、論理的思考法は注目を浴びており、小学校で「プログラミング教育」が必修科目となることが発表された(2020年度より実施予定)。コンピュータのプログラムを作るのではなく、「プログラミング的思考」を養うことが目的だ。教育学の研究者が研究してきた論理的思考法に経験によって知識を得、知識を元に仕組みを理解し、目的に合わせてデザインし、計画的に実行する力を養ってゆくという。この、新しく始まるプログラミング教育にも、山田さんたちの研究の成果が投影されることが期待されている。